

2015.5.31

現代俳句千葉

117号

平成二十七年年度

定期総会・俳句大会開催される

平成二十七年三月十五日(日)千葉市文化センターにおいて、平成二十七年年度の総会・俳句大会が開催された。総会では会員参加者八十三名、委任状二〇六名で定足数を満たした。議長には長井寛氏を選出。来賓に東京都山

中正己副会長、東京多摩地区吉村春風子副会長兼事業部長、神奈川地区尾崎竹詩事務局長の三名の方々をお迎えした。

■総会

総会では次の議案について審議し、いずれも可決した。

- 【第一号議案】平成二十六年事業報告(資料一)
- 【第二号議案】平成二十六年度会計報告(資料二)
- 【第三号議案】監査報告(資料三)
- 【第四号議案】平成二十七年事業計画(案)(資料四)
- 【第五号議案】平成二十七年予算(案)(資料五)

【第六号議案】千葉現代俳句協約改正について(資料六)

【第七号議案】幹事の補充について(資料七)

【資料一】平成二十六年事業報告

一 行事

(1)定期総会および俳句大会

- ① 平成二十六年度総会 三月十六日(日)
千葉市文化センター 出席者 九〇名
- ② 同右 俳句大会 参加者 九〇名
- ③ 同右 懇親会
三井ガーデンホテル千葉 参加者 五一名

(2)吟行会

- ① 春の吟行会 四月二十九日(祝)
柏の葉公園 参加者 七五名
 - ② 秋の吟行会 十月二十六日(日)
国立歴史民俗博物館・佐倉城址 参加者 五八名
- (3)研究句会

目次

定期総会	1~3
俳句大会	3~4
諸家近詠	5~6
私の感銘句	7~11
春の吟行会	12~13
津田沼研究句会報告	14
青葉研究句会報告	14~15
柏研究句会報告	15
図書紹介・ひろば	15
会員・会友の近況・新会員紹介	16
掲示板	16

千葉県現代俳句協会会報

① 津田沼研究句会

毎月第二火曜日 午後六時より
津田沼一丁目町会会館

② 青葉研究句会

毎月第四木曜日 午後一時三十分より
千葉市民会館

③ 柏研究句会

毎月第二土曜日 午後一時より
柏市「ハツクルベリー」

(4)ミニ吟行会 七月二十日(日)

上総国分尼寺・僧寺跡 参加者 三四名

二 幹事会

(1)定例幹事会

- ① 平成二十六年一月二十八日(火)
船橋市勤労市民センター
- ② 五月二十日(火) 同右
- ③ 八月二十六日(火) 同右

【資料二】平成26年度会計報告書（平成26年1月1日～同12月31日）

	収入の部（円）		支出の部（円）	
	費目	実績額	費目	実績額
次年度繰越金（円）				
収入合計	3,495,034		会議費	100,462
支出合計	2,201,054		会報発行費	499,258
次年度繰越金	1,293,980		通信費	35,358
			行事費	1,054,585
			印刷費	245,653
			消耗品費	26,047
			交通費	86,740
			交際費	50,000
			会報合本準備費	98,546
			雑費	4,405
			予備費	0
			合計	2,201,054
			合計	3,495,034

財産目録（円）

千葉興業銀行 普通預金	1,236,647
（野田支店） 現金	57,333
合計	1,293,980

④ 十一月二十五日（火） ホテルプラザ菜の花
 三 会報の発行
 一 二 二 号（二月二十八日刊）
 一 二 三 号（五月三十一日刊）
 一 二 四 号（八月三十一日刊）
 一 二 五 号（十二月一日刊）
 合本「現代俳句千葉」上下二巻
 （一号～一五号・十二月十日刊）

【資料五】平成27年度予算（平成27年1月1日～同12月31日）

収入の部（円）			
費目	予算額	前年度予算額	備考
前年度繰越金	1,293,980	1,276,144	
諸事業収入	1,000,000	1,200,000	吟行会等
助成金収入	750,000	740,000	
会友費収入	50,000	50,000	
35周年特別事業収入	1,100,000	-	
雑収入	10,000	10,000	
合計	4,203,980	3,276,144	

四 会員数等 平成二十六年十二月三十一日現在
 会員 四一一名・会友 二五名 計 四三六名
 主な異動
 ① 新会員三四名 転入会員二名 退会三三名
 ② 物故者（会員）北原溪秀、高桑弘夫、増田斗志、香取哲郎、奈田光生
 【資料三】 監査報告
 平成二十六年年度の会計および事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正當に処理されていることを確認しました。
 平成二十七年一月二十七日
 監査役 吉野 精
 同 長浜 聰子

支出の部（円）

費目	予算額	前年度予算額	備考
会議費	100,000	140,000	
会報発行費	500,000	500,000	
通信費	50,000	40,000	
行事費	1,000,000	1,200,000	吟行会等
印刷費	120,000	150,000	
消耗品費	30,000	40,000	
交通費	90,000	110,000	
交際費	70,000	70,000	
35周年特別事業費	1,100,000	-	
会報合本準備費	-	60,000	
雑費	20,000	20,000	
予備費	1,123,980	946,144	
合計	4,203,980	3,276,144	

【資料四】平成二十七年事業計画
 一 行事
 (1) 定期総会および俳句大会
 ① 平成二十七年総会 三月十五日（日） 千葉市文化センター
 ② 同右 俳句大会 同右
 ③ 同右 懇親会 三井ガーデンホテル千葉
 (2) 吟行会
 ① 春の吟行会 四月二十九日（祝日） 野田市清水公園
 (3) 35周年記念俳句大会 十月二十五日（日） ホテル・プラザ菜の花
 (4) 研究句会
 ① 津田沼研究句会 毎月第二火曜日 午後六時より 津田沼二丁目会館二句事前投句方式

②青葉研究会

毎月第四木曜日 午後一時三十分より

千葉市民会館 三句事前投句方式

③柏研究句会

毎月第二土曜日 午後一時より

柏市「ハックルベリー」五句当日投句方式

(4)各地の句会（ミニ吟行会等）の実施

日時、吟行地未定

二 幹事会

(1)定例幹事会

① 一月二十七日（火） 船橋市勤労市民センター

② 五月二十六日（火） 同右

③ 八月二十五日（火） 同右

④ 十一月二十四日（火） 未定

三 会報の発行

一六号（二月刊）

一七号（五月刊）

一八号（八月刊）

一九号（十二月刊）

【資料六】千葉県現代俳句協会規約改正

第十二条の三

〔現行〕

参与の任期は、三年とする

〔改正案〕

参与の任期は三年とする。ただし、再任を妨げない

を承認。

【資料七】幹事の補充について

東國人、楠見恵子、高野春子、徳吉洋二郎、なかもと淑子の諸氏の幹事就任を承認。

平成二十七年年度 俳句大会

（後援）千葉県教育委員会・千葉市・

毎日新聞社・千葉日報社

総会を終え、午後からは俳句大会が行われた。参加者は九十名。司会は高木一恵事務局長と高橋宗史事務局次長、披露は松澤龍一編集部長、清水伶、星野一恵幹事の三名。大会終了後の懇親会には来賓三名を含め五十九名が参加。司会は高橋事務局次長。俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句（兼題）の部】

●千葉県知事賞

晩年や枯野の中がやわらかい 青木 一夫

●千葉県現代俳句協会会長賞

体中やわらかくして種を蒔く 太田 涼子

●千葉市長賞

すずしろのどを切ってもみな素顔 椿 良松

●毎日新聞社賞

先頭の全てを信じ蟻の列 石井紀美子



会場風景



議長 井寛 議長

【席題の部】 席題「野遊び」「桜貝」

〈入賞者作品〉

（二句の合計点による。掲載句は二句のうち一句）

●千葉県現代俳句協会会長賞

野遊びや死者は生者の中に生き 椿 良松

●千葉県教育長賞

野遊びのひとり足りない帰り道 長浜 聰子

●千葉日報社賞

釘一本地面に立てる野の遊び 大畑 等

（これより上位入賞者の作品）

●自分史の最終章は野に遊ぶ

やわらかい雨です野遊びつづきます 林 ゆみ

●怖いのはやさしい言葉桜貝

この世への余熱まだある桜貝 金子 未完

●野遊びのみんな仲間であんな敵 青木 紫泉

桜貝いつもどこかに傷をもつ 高橋 健文

●あざやかな伏し目でありぬ桜貝 清水 伶

ふくらはぎざらりと見せて桜貝 東 國人

●かけ違う胸のボタンや桜貝 泉 志眞子

潮騒は母の揺籠さくら貝 細根 葉

●野遊びや鬼は昼寝の時間です 三須 民恵

桜貝すこし毀れていいですか 吉田 耕史

●汚染水まだ洩れ止まず桜貝 内田 庵茂

すぐそばに原発のある桜貝 鈴木まんぼう

●桜貝恋の形見と云うたわけ 矢野 忠男

さくら貝まだ濡れている今日の色 加藤 法子

●野遊びの真ん中において更年期 佐々木幸子

歩いても行けるふるさと桜貝 岡田 淑子

●五線譜をはずみゆく風さくら貝 清野 敦史

●野遊びやここが地球のど真ん中 尾崎 竹詩

・野遊びのかたまり雲形定規かな
野遊びや牛は車で売られゆく
野遊びや風の視線を引っぱって
桜貝囁くように「キスをして」
桜貝溺愛されていたような
のころとろとろ野遊びが融けていく
桜貝拾いて軽ろき水の星

重田 忠雄
野口 京子
山中 葛子
楠見 恵子
小川トシ子
林 阿愚林
松澤 龍一

胸に秘む小さき羽や桜貝
瓦礫跡ここにここにとさくら貝
野遊びやまるい形の裾の泥
桜貝青春キップはセピア色
野遊びのむかしむかしの線路かな
野遊びの頬に水こぼ風こぼ
潮騒が恋しい瓶の桜貝
野遊びや楽しい人に膨らむ輪
いちにちの笑窪のように桜貝
野遊びのあと縄文の火を焚けり
外ツ国に聞きし子の声桜貝
歳旧れど文待つ人よ桜貝
抽出しに昨日のような桜貝
野遊びの隠れし鬼は誰だっけ
野遊びの声伸びやかに空を舞う

高木 一恵
高橋 由樹
白木 暢子
栃木 きよ
森村 文子
馬淵 津枝
齊藤すず子
石井紀美子
黒澤 雅代
井上けい子
保坂 末子
大塚 弘毅
袴田 菊子
竹内 絵視
池田 幸
山中 頼子
佐藤 鈴子
なかもと淑子
吉岡 一三
川又 優
徳吉洋二郎
長井 寛
福田志津子
羽村美和子
大見 充子
高橋 博
岩佐 久
池田 博臣
鈴木 瑩子
増田 豊子

野遊びの途中は傘の骨立てる
語り部の白き眉毛や青き踏む
風紋の砂丘百選桜貝
わが妹の耳朶透けり桜貝
先見えて急ぐことなし野にあそぶ
野遊びをするだけならば美し国
野遊びの何時離さうか繋ぎし手
野遊びの音なき水の迅さかな
坂間 恒子
高野 春子
椎名 鳳人
棗 梢伊
相原 一枝
佐藤 晏行
前島きんぎょ
深山きんぎょ

(作品上の・印は来賓 正副会長、顧問特選)

へその他参加者作品・受付順
寅さんのめぐりあえたる桜貝
野遊びの果ては夜遊びバカヤロー
野に遊ぶ子等は光りになっており
野遊びの跳ねてスカートとましく
野遊びの帽子あみだについて来る
野遊びの果てマラッカを望むなり
流木に励まされてる桜貝
野遊びや川原は風の鳴くところ
見付けたと滲む笑顔や桜貝
母の香の薄紙はがす桜貝
野遊びに罫を仕掛ける十五の恋
亡き人と語り尽くせり桜貝
あれこれと老いを悟れり桜貝
野遊びの途中に消えていなくなり
石仏の笑みをいただき野に遊ぶ
桜貝いつも仮空のゼ口である
逢へぬ人また一人あり青き踏む
さよならを言はない別れ桜貝
風に和し人にも和して野の遊び
桜貝だからどうなのしわたるみ
良くしゃべる男いまだに野に遊び
生い立ちを語りはじめる桜貝

吉野 精
小林 実
星野 一恵
秋尾 敏
三苦 知夫
檜垣 梧樓
木之下みゆき
小張 直子
小高 稔
小林 俊子
横須賀洋子
小出 治重
山崎 幸子
イザベル真央
高橋 宗史
渡辺 澄
伊藤 希眸
山中 正己
吉村春風子
細野 一敏
小野 功
下村 洋子

桜貝の歌セーラー服のまま逝けり
桜貝身のおきどころ無き哀れ
桜貝ほかはなんにも拾わない
野遊びのげんげ田は今ビルが建つ
野遊びや催眠術のとけぬまま
フクシマになりて四年の桜貝
青春は抽出しにあり桜貝
ひたひたと戦の音寄る桜貝
野遊びややけに気になる骨密度
野遊びに誘われ入るや獣道
乳飲み子の夢のかたちを桜貝
さくら貝生まれは宇宙いま渚
卒業写真頃の面ざし桜貝
野遊びの人間臭さ丸出しに

高木 一恵
高橋 由樹
白木 暢子
栃木 きよ
森村 文子
馬淵 津枝
齊藤すず子
石井紀美子
黒澤 雅代
井上けい子
保坂 末子
大塚 弘毅
袴田 菊子
竹内 絵視
池田 幸
山中 頼子
佐藤 鈴子
なかもと淑子
吉岡 一三
川又 優
徳吉洋二郎
長井 寛
福田志津子
羽村美和子
大見 充子
高橋 博
岩佐 久
池田 博臣
鈴木 瑩子
増田 豊子



来賓、顧問の方々



事前句入賞の方々



懇親会



当日句入賞の方々

諸家近歌

片岡 秀樹

冬の浪碁石は黒の優勢に
薄氷や女の臉閉じしまま
冬枯れて深爪のように木々はあり
貯金箱に小銭ぎつしり寒の鯉
道端の空き塚の中雪残る

片山 依子

花芒わたしの時間壊れゆく
この川の音より知らず糸とんぼ
筋トレのをこの美学万年青の実
睡蓮にかがめば日暮れの風のあり
寒晴や終着駅の海のいろ

小池美佐子

返り花殿堂入りを避けている
耳打ちに頷くだけの冬苺
寒晴れの逆光線にある段差
水仙の湖の奥行計りかね
冬菫土偶の口の開いたまま

小高 桂子

青葉潮とよめきは遙かなる挽歌
その海の蒼の深さよ彼岸寺
一条の発光体として蛇よ
八月の耳を鎮めて遠おちの声
寝返りて寝返りて 風

棗 楯伊

往年のキャッチボールの柚子湯かな
血圧の折れ線グラフ年惜しむ
初詣熱き甘酒振舞はる
娘の家の鶏の丸焼三日かな
景況のまだ整はぬ余寒かな

窪田 俊作

菜の花に立てかけてある知恵袋
駐車違反は山茶花の赤と白
失敗は舌の先から寒椿
論談のやがて暴論隙間風
椿落つ海は軍艦連れてくる

片岡伊つ美

時雨るるや枯山水に石の鯉
枯れ残る蓮衆院選公示
夕映えの稲穂に乱れひとところ
玉葱のマリネ涙は涸れるもの
守もり一の猫に髭なし早星

菅野三重子

夕空に一月尽きて富士遙か
地の温み背負ひて出づる露の臺
鳥帰る今は昔の宿場町
むずかる子を宥めし夜あり夏の星
壺焼の榮螺の愚痴を聞いてをり

木下 昌子

寒卵高梨沙羅が飛翔する
行く春のネイルサロンの爪見本
鯉節の身をよじり出す春の宵
よく食べてよく寝る竹は皮を脱ぐ
美しき脚と湯に入る旧端午

安斎謙太郎

火を背負ひ男が走る冬の浜
おみくじはいつも小吉揚雲雀
ばんそうこう一気にはがす梅三分
孫の愚痴困っているのは冬の月
耳たぶのせつけんの泡春の星

椎名 鳳人

失くしたる指芽吹くかに火照りだす
向合えば背中が見える初鏡
おなじ方向むく怖さあり葱の花
啓蟄や小便小僧背に翼
ばらばらに暮らして家族よもぎ餅

清水 伶

裸婦ともなれず寒椿ともなれず
わたくしの頸を欲しがる藪椿
クロイツェル・ソナタ逃水の速さで
おぼろ夜の紅絹一反を思いけり
牡丹の黙秘権なるまひるかな

清水 重陽

山の雲真白に育ち甲斐の秋
空地あと四方になびく百合の花
子との距離保ちつ歩むいちご狩り
遅れきて煮くづれ湯豆腐つつきをり
初雪や佃月島路地親し

塩野谷 仁

後の世に辻もしあらば風船売
花ぐもりとはにわとりの蹲る
雲雀落つ十中八九胸に落つ
金輪際海星さびしきとき動く
うしろにもある青空と逃水と

庄司とほる

時雨るる波の伊八の荒ら木彫り
時代屋の春愁大きな古時計
冬菊が母の匂いとなる日暮
蛸壺の干されて赤き夏はじめ
すなどりの月光荒き風の盆

諸家近詠

街真中うねる運河よ謝肉祭

佐藤 映二

風船へ象の子鼻をあらんかぎり

船室に林檎の匂ふ夜明かな

天上はいま人混みや椿の実

見えぬ壁崩す槌欲し冬銀河

笹沼 郁夫

一寸の草氷柱にも日のしづく

駅員の白き手袋東風を指す

街路図に今はなき店花の雨

踏青や安房どこからも海見ゆる

春宵や地球の裏のモダンジャズ

佐久間眞城

花に哭け泣かねば散れず又咲けぬ

芍薬や十三七つ器量良し

あなかしこ絶滅危惧種の鯁喰う

誰の罪眞赤になれぬ赤蜻蛉

落葉散るはらりはらはらはらり

佐藤美紀江

猫の目の隙だらけなり冬日向

野良猫飼ひ猫冬日和の門の上

病み抜きてからたちの花くちずさむ

孫去りて酒の話題のかるたかな

水田に一本桜の影揺れて

里見 さち

真つ先に布巾のかわくクロツカス

日直の名を黒板にヒヤシンス

校庭の巨きなさくら昭和の子

百枚の手漉きの卒業証書かな

矢車や欠航決まる遊覧船

重田 忠雄

行く秋や塗装なかばの精油塔

九条は宇宙のおもさ天道虫

軍艦なき軍港黒い春日傘

雪女釈迦とイエスの子を知らず

ふるさとは大き鳥籠涅槃西風

芝崎 梓

風花は風の脱け殻愛は哀

野焼き跡罫のま昼がほっこりと

あといくつ穴掘れば足る花曇り

夜桜に触れたひと日の手を洗う

夕桜うしろ手にする直訴状

澤田 寿一

蠟梅の隠し事には触れまいと

節分の鬼は優しく車椅子

さくらんぼ種は静かに納まりぬ

水仙の細身が喘ぐボディビル

省エネを無口が語る釣忍

佐藤 浩子

春立てり水のいのちを合唱す

轉りの明るさにあり父母思ふ

図書館に手書きの聖書涼しかり

岩に波青鷺りんと動かざる

稲滓火の三筋真直ぐや居久根の地

佐々木幸子

鼻が真うしろをみる日暮あり

いまもこの道が好きです鹿の子百合

浅春の猿ましちのまなこ暗すぎる

若草を蹴上げ鉄棒決まりけり

パリコレにまさる毛虫が木を昇る

佐藤 信頭

嘔吐きの為の一日四月馬鹿

料峭や内には騙し外にテロ

やけっぱちのやうに辛夷の散り急ぐ

花時雨おせん身投げの海の哭く

露味憎の苦さ加減と老い加減

佐々木 禎

河原行く男一人に蝶付きて

一病が生きる力ぞ若葉風

花の日々浮かれて老いを忘れをり

能面の見おろす闇の冴返る

木々芽吹く雨に明るき昼の庭

佐藤 禎子

遠雷を聞く透明な爪をもて

枇杷熟れて電気仕掛けの水車かな

オルガンの平らなペダル大西日

冬の雲眩しき方へ球返す

窓口にぼっと人来る雨水かな

白木 暢子

桃二つ寂しさ三つ置いてゆく

セーターに通す右腕遠くなり

一年の長いため息シクラメン

身の丈は変わらぬままに桜餅

声を聞く手に触れる夏は来る

高橋 宗史

山桜馬穏やかに黙秘中

木の芽風日本語という柔らかかさ

かたくりの花と住みいて帰らざる

薔薇新芽棘持つことの重さかな

側溝はくれないの棺花吹雪

私の感銘句

加納ひでこ

作者名 号頁

秘密法座視するままに冬の蝶	並木 邑人	112 2
空蟬になつてゐるのに本氣の眼	種村 佑子	112 3
秋冷やバターナイフにある曇り	松澤 龍一	112 13
すかんぼすかんぼ集めて空をふるわせる	久野 康子	113 4
行き先はきさらぎのあの水鏡	塩野谷 仁	114 9
戦争と平和どんぐり急くなよ	山中 葛子	115 2
詫び状がまだ届かない敗戦日	秋谷 菊野	115 4
忘れないための消しゴム原爆忌	秋尾 敏	115 4
断片のような復興だから亀が鳴く	明石春潮子	115 5
秋の暮さらわれてでも逢いたい	横須賀洋子	115 7
空蟬になつてゐるのに本氣の眼	種村 佑子	

馬場 馬子

たぶん死は冬のさくらのようにくる	直江 裕子	112 2
虎落笛老いに第三反抗期	長浜 聰子	112 3
またひとり鯛雲から招待状	白井 春こ	112 3
片言がCMまねる初笑い	橋口 久子	113 5
行き先はどこでもいいの春帽子	保坂 末子	113 7
煩惱や風に託した落し文	山端かすみ	114 3
相続のはなし頓挫し青あらし	前田 清方	114 4
約束の又ながれさう桜餅	岡崎 翠	115 4
忘れないための消しゴム原爆忌	秋尾 敏	115 4
ケイタイもスマホも持たぬ小鳥来る	岡田 春人	115 6
忘れないための消しゴム原爆忌	秋尾 敏	

我が国は、世界唯一の被爆国。毎年、広島、

長崎で原爆犠牲者の慰霊祭が行われる。被害状況は、写真等で見る限り言葉では言い表せない惨状です。そのことは、決して忘れてはならない。これ等のことを「消しゴム」で、うまく表現された作品だと共鳴しました。

重田 忠雄

こおろぎの横顔人間探求派	芝崎 梓	112 3
春寒しいい人ばかりは疲れませ	星野 一恵	113 6
八月の負を傾ちもつ正座かな	渡辺 澄	114 2
青き踏むマグマ溜りの国にいて	渡邊 廣子	114 2
蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす	山中 葛子	114 3
寒月にいちばん近い玩具箱	門谷 杜人	114 3
狐の子使いこなせぬ二枚舌	岩尾 可見	115 4
獺祭忌眼鏡に空を置き忘れ	秋尾 敏	115 4
秘めことはなべて筒抜け枯れ木立	新井 秋芳	115 5
箸使ふものだけ食べる生身魂	岡田 春人	115 6
こおろぎの横顔人間探求派	芝崎 梓	

かまきりの顔はよく見ることがある。しかしこおろぎの顔を意識して見たことはない。しかも横顔である。横顔といえば正岡子規、子規といえは「写生」である。
「人間探求派」は新しい課題に対する石田波郷、加藤敏郎、中村草田男らの試みに対する山本健吉の命名であり、昭和十四年のことである。すでに七十五年前のことであるが人間探求に終りはないとの思いを強くする句である。

岡田 春人

年とれば影も年とる柳の木	鳴戸 奈菜	112 2
到来の冬瓜づくし徒食せる	田中 喜翔	112 4
海じゅうのセシウムを呑む大海鼠	長井 寛	112 4
春隣赤いランブが眼に残る	野口 京子	113 5

行き先はどこでもいいの春帽子	保坂 末子	113 7
蘿蔔の納豆昭和二十五年の息	松澤 龍一	113 7
歩かねば肉体怖し苔に花	山中 葛子	114 3
富士山を胴上げにする夏木立	吉田 耕史	114 4
メロン切るとの神経を断ちますか	横須賀洋子	114 4
影はみな足より伸びて雲の峰	内田 庵茂	115 4
春隣赤いランブが眼に残る	野口 京子	

冬の季節に赤い色は目立つ。印象にも残る。紅きもの枯野に見えて拾はれず 山口誓子 くれなるの色を見てゐる寒さかな 細見綾子 などの句があり、この句も格別珍しくはない。また、ランブと言うと昭和の句かと思うほど古い。一読そんなことを思った。しかし、このランブは、明治大正昭和と使われた重要文化財の建物のなかにある。それぞれの時代をなつかしんでいる。春は近い。現実にもどつて、さあ前進だ。

小張 直子

たぶん死は冬のさくらのようにくる	直江 裕子	112 2
虎落笛老いに第三反抗期	長浜 聰子	112 3
コンビニでたむろしている余寒	星野 一恵	113 6
冬鴉笑つていない眼が並ぶ	保坂ミエ子	113 6
行き先はどこでもいいの春帽子	保坂 末子	113 7
夏大根飴色に煮え加齢臭	実粉 繁	114 2
歩かねば肉体怖し苔に花	山中 葛子	114 3
爽やかな出会いのあとはいつも風	青木 一夫	115 4
子が駆ける母のひら大花野	石井紀美子	115 5
ふんだんに飲める水あり原爆忌	井上きよ美	115 5
行き先はどこでもいいの春帽子	保坂 末子	

拝読して此の様に楽しい作品に出会えた事はごく稀であり嬉しさも倍加致しました。春帽子

と聞いただけで心は護謨毬の様に弾み外に遊びに行きたくもなりません。中七のどこでもいいのと言うフレイズに読者は共感し待春の気持が大きく脹らんで行きます。私も春らしい色の毛糸で帽子を編み友達を誘って外出を心がけたいと思います。作者の元氣な御姿を想像しながら、行き先はどこでもいいの“本当にそうですね”。

柳本 ゆみ

老残の彩は見せまじ七変化
 空の疵さがしつづける秋の蝶
 生きるとは今光ること草蚩
 朝寒や始発しづく入線す
 葉さくらとなりぬ書を捨て街に出よ
 霧重き砂丘滅びの坂いくつ
 まだ夏の残れる帽子洗いおり
 頑具箱ひっくり返して夏果てぬ
 空缶を蹴つて花野を明るくす
 首を振る重機獣めく冬野

井上きよ美

秋寂しガラスケースに子規の杖
 空蟬になつてゐるのに本氣の眼
 運動会園児みんなに金メダル
 明日よりはバスの来ぬ道犬ふぐり
 入学や自分の鍵を持つ机
 靴先で男が野火の向き変える
 番号の打たれし化石夏の果
 通学路ころがるように夏休み
 明易し他人のような足の裏
 鷹柱立つという日はただねむし

山崎 芳子 115 4
 青木 一夫 115 4
 相原 一枝 115 4
 浦野 五郎 115 4
 荒井 玲 115 4
 秋尾 敏 115 4
 岡田 淑子 115 5
 大川 園子 115 5
 石井 浩美 115 6
 興津 恭子 115 6
 高野 礼子 112 3
 種村 佑子 112 3
 鈴木 典子 112 4
 股野 久子 113 7
 平木智恵子 113 7
 保坂 末子 113 7
 森 章 114 3
 田村 隆雄 114 3
 村田 珠子 114 3
 吉田 耕史 114 4

吉野 精

たぶん死は冬のさくらのようにくる
 火の牙を野に放ちけり秘密法
 戦争の廊下無数の寒卵
 空つぼの運河五月の樹が騒ぐ
 八月の負を頒ちもつ正座かな
 蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす
 いづくかに偵察衛星稲の秋
 夏雲に押されてデモの端にゐる
 子が駆ける母のてのひら大花野
 上つて下つて女を捨てて滝の正面
 火の牙を野に放ちけり秘密法
 個人の秘密はさらけだされ国家の秘密は護られる。国家の秘密とはなにか。秘密の無い平和な国を希う。
 この句は未来の日本に不安をもっている。

菊地 京子

水仙の系図いちばん上は海
 またひとり鯛雲から招待状
 席譲られるなんて忽ち冬銀河
 はらはらと噂話のたまる夜桜
 船唄が紅葉絵巻に棹をさす
 弟という距離がある冬座敷
 蠟燭を吹き消す未来には水母
 やぼつたい母情もましり花は葉に
 獺祭忌眼鏡に空を置き忘れ
 足湯して足置いてくる十三夜

直江 裕子 112 2
 並木 邑人 112 2
 檜垣 梧樓 113 5
 松澤 龍一 113 7
 渡辺 澄 114 2
 山中 葛子 114 3
 内田 庵茂 115 4
 石崎多寿子 115 4
 石井紀美子 115 5
 大畑 等 115 6
 並木 邑人
 直江 裕子 112 2
 白井 春こ 112 3
 種村 佑子 112 3
 原島 典子 113 7
 村上千代美 114 2
 三好美穂子 114 2
 柳本 ゆみ 114 3
 山中 葛子 114 3
 秋尾 敏 115 4
 岡田 淑子 115 5
 國武 和子 112 2

田沼美智子

自分史の最終章へ寒椿
 雪吊りの蒼穹を負う男振り
 又ひとつ嘘をつかせる花の酔
 江戸切子きらりと光り夏兆す
 墓守みな昭和一桁花茨
 白蓮や白無垢着せぬ別れかな
 詫び状がまだ届かない敗戦日
 しんがりへ涙腺ゆるむ体育日
 子が駆ける母のてのひら大花野

寺田美津江 112 4
 保坂ミエ子 113 6
 細野 一敏 113 6
 森 孝子 114 2
 三苦 知夫 114 4
 馬場 暁子 114 4
 秋谷 菊野 115 4
 秋葉 紅陽 115 4
 石井紀美子 115 5

沈黙は無罪セックスレスジャパン
 著我咲いてやさしき人は許すまじ
 牡丹の芽育てわたしはジェネリック
 牛の反芻日本語という隴る感
 戦争の廊下無数の寒卵
 原発を使わぬ時間蝉しぐれ
 蝉の鳴く木を中流と思いきり
 忘れないための消しゴム原爆忌
 断片のような復興だから亀が鳴く
 人間を見ざる鶴の目の荒野かな
 沈黙は無罪セックスレスジャパン
 「沈黙は無罪」とは、多くの国民が社会や隣人に自己主張せず、波風立てぬ消極。非個性化している精神性への批判である。「セックスレスジャパン」では、国家と個人の関係を比喩し、国家的に数値が高い。日本人のセックスレスは、世界的に数値が高い。不満を言わない国民と、知らぬふりの政治家。双方が真摯に向き合えないセックスレス。この句の核心は、作者の真意は、9条や秘密保護法等に、真剣に「もの言え」であろう。

並木 邑人 112 2
 鳴戸 奈菜 112 2
 長浜 聰子 112 3
 普川 洋 113 5
 檜垣 梧樓 113 5
 吉岡 一三 114 3
 青木 一夫 115 4
 秋尾 敏 115 4
 明石春潮子 115 5
 大畑 等 115 6

ヤマグチオトヤ寒三日月を懐に
 啼きたくてならぬ狐に憑いてみる
 父母を遠くに置いてさくらもち
 唐辛しの逆立つ赤をわたくしす
 猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌
 上品な妻無花果のかはをむく
 忘れ物取りに戻れば黄落期
 まんじゅうが確にあつた夜の秋

蚊が嫌い、蛙が怖い、ナメクジ、ゲジゲジと
 ぞろぞろ出てくる。ひとり「饅頭がこわい」と
 布団を被る。怖がらせようと枕元に饅頭を並べ
 暫くして覗くと「こわいこわい皮までこわい」と
 とムシヤムシヤ食べている。怒った仲間本当に
 怖いものはと詰め寄る。「今度こわいのは濃い
 お茶を一杯……」有名な落語。
 夏の季語「夜の秋」と措辞したことで句が成
 立。危うい面白さがある。秋も近い。

佐藤 鈴子

たぶん死は冬のさくらのようにくる
 掴まれて昼寝の夢から逃げ出せず
 浜屋顔自縛ゆるめる夕暮は
 秋刀魚食い人間らしくなりにけり
 どこでくらしても糸のころぐさのそば
 御輿揉む万の袴りの手拍子に
 麦秋や遂に生家のがらんどどう
 泉渾々老いたエリーゼのために
 蟻地獄に落してしまった記憶
 人間を見ざる鶉の目の荒野かな
 麦秋や遂に生家のがらんどどう
 半世紀前頃までは、日本の点在する山深い村
 落も、三世代が同居する豊かな賑わいに活気が

松澤 龍一	113	7
宮本美津江	114	2
山村 則子	114	3
柳 恵子	114	4
イザベル真央	115	4
岡田 春人	115	6
田中つとむ	115	9
白井 春こ		
直江 裕子	112	2
鳴戸 奈菜	112	2
下村 洋子	112	4
徳吉洋二郎	113	5
林 紀之介	113	7
村田 珠子	114	3
前田 清方	114	4
秋尾 敏	115	4
石井紀美子	115	5
大畑 等	115	6
前田 清方		

あつた。現在は老人と古い空家が残る。掲句
 はそのような過疎地ではないかも知れないが、
 一連の五句から継ぐべき人がなく、墓だけが存
 在する淋しさが、そくそくと伝わってくる。他
 家の人となった自分も数年後には同じ様な体験
 をすることになる。「たましいの帰るところ、
 それはふるさと」と思うところは変わらない。

栗 梢伊

待春の象のはな子の皺に礼
 戦争の廊下無数の寒卵
 十二月八日消すこと出来るポールペン
 焼き鳥の空串日本革命論
 八月の負を頒ちもつ正座かな
 新樹燃え道祖神も燃えていた
 満月の迷つて曲がる島前路
 泉渾々老いたエリーゼのために
 梅干して普陀落渡海忘れたり
 食卓にひらくパソコン色鳥来
 戦争の廊下無数の寒卵
 廊下の奥に立っていた黒々とした存在は無気
 味であるが、沢山の寒卵が転がっている方が更
 に無気味ではないか。
 寒卵は髑髏かも知れぬ。

近藤 幸子

春耕や肥料の袋なないろに
 春色を使いきつたる五月晴
 原爆忌水平線に取一つ
 寄り添えりこの手火花の果てるまで
 余花の時いちばん遠くへかくれんぼ
 富士山を胴上げにする夏木立

高木 一恵	112	3
榎垣 梧樓	113	5
鈴木 陽子	113	7
松澤 龍一	113	7
渡辺 澄	114	2
吉野 精	114	2
イザベル真央	115	4
秋尾 敏	115	4
大畑 等	115	6
石井 浩美	115	6
榎垣 梧樓		
平木智恵子	113	7
日野 葉子	113	7
実籾 繁	114	2
森 孝子	114	2
山中 葛子	114	3
吉田 耕史	114	4

墓守みな昭和一桁花茱
 忘れないための消しゴム原爆忌
 まだ夏の残れる帽子洗いおり
 子が駆ける母のてのひら大花野
 春耕や肥料の袋なないろに
 春耕は希望を思わせます。土を耕し、植物が
 よく育つよう土を柔らかくします。種を蒔いてか
 らは、肥料、天候などに心配りをします。作者
 の肥料の袋を見る目には、優しさと希望を感じ
 ます。これから成長した野菜や花の苗が、やが
 て美しい色を沢山見せてくれることに、夢を持っ
 ておられるのでしよう。自然界に於ける色の美
 しさを深く感じられ、それらを育てる肥料が虹
 色に見えたのです。

袴田 菊子

空井戸を覗けば遠い空だつた
 クレソンのこだわり立入禁止なる
 戦争の廊下無数の寒卵
 ふうこや此の町を出て雲に乗る
 焼き鳥の空串日本革命論
 秋つばめ夕日のかげら掬いけり
 水引草揺れねば何も起らない
 墓守みな昭和一桁花茱
 落し文拾えば風の音がする
 旅立ちには口紅ひとつ冬の蝶
 空井戸を覗けば遠い空だつた
 空井戸とは、「涸れ」「からっぽ」覗いてみれ
 ば、遠い日の記憶の空があるばかり。満々と湛
 えた筈の水が無い、とうに涸れていたらしい。
 虚しさの中の記憶を辿れば、あの戦争と貧しさ
 の中で、何かを求めて生きてきたであろう「遠い日」

鳴戸 奈菜	112	2
富澤さち子	112	4
榎垣 梧樓	113	5
藤岡 尚子	113	6
松澤 龍一	113	7
若林 佐嗣	114	2
山崎 政江	114	4
三苦 知夫	114	4
石井紀美子	115	5
岡田美美子	115	6
鳴戸 奈菜		

の故郷。今は懐かしさで一杯…。
ボタ山の地下水が、洗炭で珈琲色のあの川岸
で、こだわりのクレソンを知らずに採っていた
なんて、今は昔の語り草です。

石井紀美子

暮穴を出てひかえめに生きていく 椿 良松 112 2
 静電気のような友たち水温む 長浜 聰子 112 3
 こおろぎの横顔人間探求派 芝崎 梓 112 3
 白いページ桜吹雪に空けておく 中村 冬美 113 5
 又ひとつ嘘をつかせる花の酔 細野 一敏 113 6
 靴先で男が野火の向き変える 保坂 末子 113 7
 向日葵たち戦の前に立ちふさぐ 吉野 精 114 2
 歩かねば肉体怖し苔に花 山中 葛子 114 3
 揚羽蝶不意に止まるは嗚咽のよう 山崎 政江 114 4
 忘れないための消しゴム原爆忌 秋尾 敏 115 4
 静電気のような友たち水温む 長浜 聰子

友人が静電気のようにあるとは、「触れたくない人、距離を置きたい人、嫌いな人」等を想像させる。友人との関係が穏やかではないことの喻えが意表を突き面白い。
 しかし、掲句はそれだけではない。それは一時的なこと、「人」と言わず「友人」と言い切る仲。時に衝突し、刺激し合う良さライバルなのである。「静電気」とは誠に言い得て妙である。季語の効果あつての表裏一体の直喻に感銘。

牡丹の芽育てわたしはジェネリック 長浜 聰子 112 3
 待春の象のはな子の皺に礼 高木 一恵 112 3
 流れつつ澄みゆく水や山頭火 徳吉洋二郎 113 5
 うしろへとうしろへと耕してゆく 林 紀之介 113 7
 やばつたい母情もまじり花は葉に 山中 葛子 114 3

汗馬馬春の星座を駆け巡る 八重樫弘志 114 3
 妖怪の踊り疲れて昼寝かな 林 阿愚林 114 4
 猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌 イザベル真央 115 4
 ふなっしー振り落としたるサンタ帽 遠藤 寛子 115 5
 恋の句に強がり少しサングラス 秋山 勝男 115 6
 妖怪の踊り疲れて昼寝かな 林 阿愚林

鳥取県境港市は漫画家水木しげる氏の故郷。
 「ゲゲゲの鬼太郎」の妖怪ロードもあり、通称妖怪寺には、水木氏の原画百枚程の天井絵がパワースポットとして人気がある。それらの世相を先取りした俳諧味もある一句である。

鳥取県境港市は漫画家水木しげる氏の故郷。
 「ゲゲゲの鬼太郎」の妖怪ロードもあり、通称妖怪寺には、水木氏の原画百枚程の天井絵がパワースポットとして人気がある。それらの世相を先取りした俳諧味もある一句である。

興津 恭子

観音のそり返る指冬に入る 野復美智子 112 2
 蘆刈を悠然として川曲る 末広 陽恵 112 4
 産声にこの世厳しき寒の入 福田志津子 113 6
 種を蒔く七つ道具に翁の手 増田 斗志 113 7
 麦踏みをつぎの父の遠さかな 渡辺 澄 114 2
 万緑の沸点過ぎれば風になる 山崎 幸子 114 2
 生きるとは今光ること草虫 相原 一枝 115 4
 たましいの蒼く乾きて落し水 明石春潮子 115 5
 蜂の巣を育てておりぬ物忘れ 渡辺 礼子 115 5
 子が駆ける母のてのひら大花野 石井紀美子 115 5

開くまで祈り続ける白つばき 椿 良松 112 2
 秋の噴水逡巡は人にあり 野復美智子 112 2

松澤 伸住

ブルースの青の隙間へ小鳥来る 芝崎 梓 112 3
 残鶯よわたしだけという音譜 高野 礼子 112 3
 万緑へ遊び疲れた三輪車 富澤さち子 112 4
 ひとり欠けたる団欒の月おぼろ 藤田 富江 113 7
 メッセージとどけにもどる石嶼玉 山中 頼子 114 2
 踏切と夕日が好きで卒業す 森村 文子 114 2
 流星をひとりの夜に招き入る 井上けい子 115 5
 手袋へ孤独の夢を詰めている 興津 恭子 115 6

第52回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は 7月31日 (必着)

□応募規定 三句一組・二〇〇句
 何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。前書き不可。所定用紙使用。〒住所、姓号、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は定額小為替(無記名で)又は現金書留に限る。必ず作品同封の事。
 □送付先 〒104 東京都千代田区外神田6-5-4 倍楽ビル7階 現代俳句協会全国大会係 03-38391810
 □締切 7月31日必着
 □顕彰 協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、優秀作品(三賞及び秀逸賞等)を「現代俳句」及び協会刊行物に採録。
 □賞 大会賞、毎日新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。
 □全国大会 平成27年10月24日(土)午後時より、「東天社」上野店 〒110 東京都台東区池之端1-4-33 03-38281511
 □記念講演 中沢新先生 演題未定 (明治文学専任教授・哲学者・人類学者など)
 □講評 宮坂静生会長はじめ協会幹部
 □懇親会 午後5時より(会費6千円)
 お入賞3組(9句)同時投句に限り、投句料6千円のところを5千円にいたします。

主催 現代俳句協会 後援 毎日新聞社

春の吟行会

清水公園（野田市）… ツツジ・葉桜のみち

会場 清水公園内 聚楽館 平成二十七年四月二十九日（昭和の日）



藤棚の下で

東武野田線の「清水公園駅」までは、船橋駅からちようど小一時間。明治二十七年からこの地にあつたという清水公園。公園というより地域一帯が自然とともに住む人も訪れる人も分け隔てなく包み込んでくれるような、昔から知っていたような懐かしさがありました。入口までの長らかな道すがら、日差しが強さに日傘や日よけの帽子がありがたい日となりました。

この清水公園には、昭和になると野田市教育委員会により万葉植物教材園が開設されたそうです。関東地方には東歌や防人歌をはじめ、赤人や虫麻呂などの歌に詠み込まれている植物が多くあります。天平時代の文化に触れることで市民の心を豊かなものにしたたり、学問上の資料としたりする目的で、公園全域に万葉の歌を解説した歌碑が立てられたそうです。植えられた植物は数百十種にのぼるといふことです。

絶好の花日和、句会場となる聚楽館は、和室の良さを生かして襖を取り外し、全室が大広間のようになりました。回り廊下の和風のこの館に花々の中を巡り句材を選びすぐった参加者七十八名の皆さんが続々と集まりました。十二時に投句が締め切られ、筍ご飯の入りたお弁当とお茶が配られ、楽しい昼食時間となりました。一時からの句会は大木氏の司会で始まりました。会長大畑氏のご挨拶の中で、「野田市で吟行が行われるのは五年ぶり、その前は十六年前、合本を見るといろいろわかります。吟行の句は、捨てられることもあるが、見てみると面白い。」とあり、家で合本を見てみようと思いました。

熱気あふれる選句、披講と続き悲喜こもごもの歓声ため息が漏れ聞こえる中での結果発表、成績発表、講評となりました。ツツジだけでなく、牡丹、藤、バラ、ネモフィラ、スイセン、ジャスミンなど春の花にうまれた句会でした。（白木暢子記）

〔入賞者作品〕（二句のうち一句）

口止めは無理よつつじが赤すぎる 石井紀美子
 ことりとも言わぬ脳味噌夏木立 大見 充子
 ・ひらひらと古い葉桜の影を踏む 鈴木 郁子
 白牡丹仏の顔に目鼻なく 伊藤 希眸
 ・ボート漕ぐ少年男の鬚り見せ 富澤ムツ子
 牡丹崩れて永遠の忘れもの 秋尾 敏
 新緑をまるごと吸ってにぎり飯 佐々木幸子
 山藤の下でゆらりとまた会おう 檜垣 梧樓
 風孕みたしハンカチの木も夏服も 市川 唯子
 みどりの日仁王は憤怒の目を洗う 木之下みゆき
 牡丹に紙おしろいの渴きあり 伊藤 典子
 葉桜となりて仁王の虚脱感 戸邊 光一
 醒めぎわの首から上は白牡丹 細野 一敏
 藤棚の雁字搦めの自在とも 加藤 法子
 ぼうたんと私の比重同じかも 林 ゆみ
 惜春の丸太ときどき鯉になる 山崎 政江
 葉桜や平和を知らぬ兵の墓 高橋 博
 ・昭和の日暗がりから人来るように 森村 文子
 算額や尻尾忘れし青蛙 高木 一恵
 桜の実一人の家族存在す 吉岡 一三

〔その他参加者作品・受付順〕
 膨脹する宇宙つつじの海満ちる 高橋 宗史
 引き寄せる句碑の歳月つつじ燃ゆ 野口 京子

・むらさきは野田のつつじのおもてなし
 試歩漫歩花鳥詠詠轉れり
 乗り換えて春の果まで戻ろうか
 「算額」や若葉に染まる万歩計
 水の端掴んで蝌蚪の尾をゆらす
 算額にホバリングせる熊ん蜂
 紛争と日常の狭間つつじ燃ゆ
 赤松の芯や明るきものに倦み
 どの道を曲れどつつじ日和かな
 藤棚に入り大宙をわたくしす
 貝殻を踏めば劫初の波の音
 新緑のやさしいトゲに嘘つかれ
 花騒に貌さらわれし古仏たち
 昭和の日彼の算額の在りどころ
 葉ざくらや昔愛国少女くる
 来た道をつつじの中で見失う
 掃く前の牡丹桜の花筵
 ターザンになりきる少年夏来たる
 白藤のよそよそしかり水走る
 白藤やうしろの正面誰でしょう
 めかしたる芍薬に虫のブローチ
 石楠花憂うヒマラヤに地変
 藤の風女も鎌を研いでいる
 春爛漫見えぬおののき一、三あり
 香り満ちみつ芍薬の反抗期
 唯一の日の丸寺に昭和の日
 七重八重愁ひ深かり白牡丹
 花みんな江戸に武州に向いている

椎名 鳳人
 小林 俊子
 上野 紫泉
 栃木 きよ
 小張 直子
 内田 庵茂
 徳吉洋二郎
 大畑 等
 黒澤 雅代
 長井 寛
 松澤 龍一
 三浦 侃
 並木 邑人
 実初 繁
 横須賀洋子
 三宅たくみ
 イザベル真央
 増田 元子
 永妻 和子
 楠見 恵子
 赤羽根めぐみ
 三上 啓
 笈沼 早苗
 なかもと淑子
 西崎 久男
 重田 忠雄
 山崎 幸子
 吉野 精

つつじ咲く時空超えれば海がある
 新樹光四方から人の集まり来
 ぼうたんにとりどりの人群れてをり
 ・青葉無限あづまをとこと歩きをり
 たんぼほの絮は土産と赤リユック
 残り時間に華をいたたく若楓
 牡丹熟れ雲の彼方へ旅立たむ
 昭和展望つつじの海の段落に
 つつじに風ファンタジアに迷い込む
 大つつじ幾度人をあやめしや
 ・乗り継いで来し終章は藤の呪縛
 つつじ山仁王門より飛び火して
 ・野田藤や七十路にしてかくしゃくたり
 祖母が先頭風車風を切る
 俳句とは格闘技にて躑躅炎ゆ
 一本の枝も余さずつつじの緋
 緑さす木馬はずでに老いにけり
 つつじの緋抱いて昭和の句碑ねむる
 母の日の先ぶれのごと鬻の香
 空の底ひよいとほつ夏つまみたり
 彩りの風に声あり阿吽像
 躑躅曼荼羅惑星いつもひとりぼち
 牡丹を測るオクタブの右手
 山つつじ人は通さぬ風之道
 花は葉に地球を睨む仁王立
 水温む少女絶叫して奈落
 緑蔭の鐘樓風の吹きわたり
 うすあおき未来の子供昭和の日

金田めぐみ
 井上きよ美
 大塚 弘毅
 久野 康子
 林 計男
 井上けい子
 金子 未完
 諸藤留美子
 白木 暢子
 小林 実
 長浜 聰子
 星野 一恵
 内田 正成
 富澤さち子
 吉田 耕史
 保坂 末子
 岡田 淑子
 山中とみ子
 秋山 冷子
 林 阿愚林
 鈴木 瑩子
 池田 博臣
 藤井 遥
 澤田 寿一
 小野 功
 田村 隆雄
 岩崎 令子
 小川トシ子

(作品の上の・印は正副会長、顧問特選)



入賞の女性三人。
 左より 石井さん、大見さん、鈴木(郁)さん

■第四回ミニ吟行会のお知らせ

とき 平成二十七年七月十二日(日)
 十四時から

会場 銚子イオンモール
 集合 銚子電鉄ホーム 午前十時二十分
 会費 五〇〇円

申込先 六月三十日 定員は五十名(先着順)
 連絡先 山田邦彦(携帯〇九〇・三三三・五三六三三)
 高橋宗史(TEL 〇四一七二・五三三八二)
 屏風ヶ浦・飯沼観音・魚市場・
 利根川など見所多数

備考

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二七三回 (平成二十七年二月十日)

司会 小林 実

大寒や子規の日記にココアあり
 とんとんと水の温むをたずねけり
 冴える夜のたれもいない風景画
 突然の大きな穴や海鼠食う
 風向の変っただけで猫の恋
 日脚伸ぶ女子大正門鉄格子
 ちゃんちゃんこ飯面のままで死んでゆく
 春満月わが醜ついに焙られる
 料峭の一杯限り「十四代」
 建国日隣の家もひとりかな
 少年の産毛の光る冬木の芽
 石放り薄氷に穴あけてやる
 栄螺曰く俺は石川五右衛門
 寒稽古すみて親しき便りかな
 猫の恋寝耳に水のうわさかな
 みじろかぬボリスの車春の月
 きりたんぼ命の綱の結び目に
 あちこちと折り合いつかぬ冬の草
 明るいニュースやと見つけ鳥雲に
 寒卵かきこむ朝餉ただ独り
 抽出に錆びた切出し春寒し

後藤 章
 林 阿愚林
 楠見 恵子
 大畑 等
 小林 実
 前島さんや
 徳吉洋二郎
 横須賀洋子
 榎垣 梧樓
 イザベル真央
 村上 澄子
 山中 葛子
 吉野 精
 股野 久子
 深山きんぎょ
 岡田 淑子
 大村 錦子
 なかもと淑子
 金子 未完
 大塚 弘毅
 佐藤 晏行

またあがる大王鳥賊よ世は春ぞ
 朧夜の万年筆の重さかな
 春浅し殻のひらかぬピスタチオ
 春の雨貴族歩きをする日なり
 ヒアシンス俳句にされて嬉しもう
 水温む燃えないものと萌ゆるもの
 春月の尻つば追いかけて木挽町
 春一番大いびきはライオンの部屋
 梅干の種しやぶつてもまだ寒い
 軽トラのちり紙交換春の昼
 恋猫に視線盗られてからの闇
 復興道路春雨を聞いており
 春の風邪絵画展より来るらし
 枝に鳥空に飛行機永き日を

大村 錦子
 深山きんぎょ
 イザベル真央
 横須賀洋子
 吉野 精
 村上 澄子
 徳吉洋二郎
 金子 未完
 榎垣 梧樓
 前島さんや
 山中 葛子
 白木 暢子
 股野 久子
 後藤 章

●第二七五回 (平成二十七年四月十四日)

司会 横須賀洋子

花筏ベニスに行けず片隅に
 花屑の零れておりぬ試着室
 葉桜やとところどころに指名犯
 朧夜の眼玉抜けたる肖像画
 朝は血のさらさらさくら終わりかな
 花冷えの胸骨を割り生きて在る
 花の雨迎えが来ないシンデレラ
 フクシマとなりて幾とせ蛇穴を
 花の宴溺れる河童遠巻きに
 葉桜や一人足りなばい草野球
 ため息を落とせばたんぼ受けとめる
 寒桜うむを言わせぬまつりごと
 裏山の臍のあたりがほくそ笑む
 亡夫来て朝餉促す朝寝かな
 あれよあれ思い出せない春の雪
 掌のつくる凹に春の頬
 闇がありいろいろが芽吹きたり
 自分では何も決めない芽吹きたり
 閉店のドアの張り紙桜東風
 しゅくしゅくと後期高齢滝桜
 手鏡の中のきらめき春の水

吉野 精
 楠見 恵子
 横須賀洋子
 大畑 等
 小林 実
 前島さんや
 山中 葛子
 白木 暢子
 股野 久子
 後藤 章

大村 錦子
 深山きんぎょ
 イザベル真央
 横須賀洋子
 吉野 精
 村上 澄子
 徳吉洋二郎
 金子 未完
 榎垣 梧樓
 前島さんや
 山中 葛子
 白木 暢子
 股野 久子
 後藤 章

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第四十四回 (平成二十七年二月二十八日)

司会 矢野 忠男

不明者となる陽炎に近づいて
 毛糸編むくるりくるりと愛は哀
 母胎という最小の海春満月
 魔法の飛ぶ恋猫も飛ぶマンハッタン
 春立つ日荒砥中の砥仕上げの砥
 啓蟄や脳に手が出て足が出て
 冬眠の徴兵制度もぞもぞず
 春寒し裏木戸だけが新しい
 じゃんけんのおあいこ続く建国の日
 点滴やポトリポトリと日脚伸ぶ
 下萌や団地の庭を巡る猫
 おぼろ夜の端を捲ればある本音
 燃えきれぬもの昏れ残る野焼跡
 冬青草少年兵が覗いてる
 針供養千人針は避けておく
 風光る肩の力を抜くがいい

加藤 法子
 芝崎 梓
 椿 良松
 鈴木まんぼう
 矢野 忠男
 馬淵 津枝
 並木 昌人
 三須 民恵
 山崎 幸子
 大塚 弘毅
 小高 稔
 石井紀美子
 長浜 聰子
 徳吉洋二郎
 細野 一敏
 細根 栗

大塚 弘毅
 馬淵 津枝
 並木 昌人
 大畑 等
 石崎 梓
 芝崎 梓
 石井紀美子
 長浜 聰子
 加藤 法子
 徳吉洋二郎
 細野 一敏
 山崎 幸子
 細根 栗

大塚 弘毅
 馬淵 津枝
 並木 昌人
 大畑 等
 石崎 梓
 芝崎 梓
 石井紀美子
 長浜 聰子
 加藤 法子
 徳吉洋二郎
 細野 一敏
 山崎 幸子
 細根 栗

●第四十五回 (平成二十七年三月二十六日)

司会 大塚 弘毅

蟻穴を出て蟻のまま生きていく
 花かたくり妻に第一反抗期
 女と男靴紐のあそびほど
 蛇穴を出たりイエスは入浴中
 終活がちらちら春の水注ぎ
 落椿いつさい知らぬことにする
 蛇穴を出て一部始終は語れない
 草餅がくる半日を空けておく
 紙袋さげ三月の影法師
 春眠の本はいつでもベストセラ―
 花辛夷空いつばいの笑ひ声
 性という厄介なもの梅真白
 転た寝をくすぐらられては花菜風
 目こぼしの蕨悠々自適とか
 ぬるま湯や蛤じつと待つばかり

椿 良松
 馬淵 津枝
 並木 昌人
 大畑 等
 石崎 梓
 芝崎 梓
 石井紀美子
 長浜 聰子
 加藤 法子
 徳吉洋二郎
 細野 一敏
 山崎 幸子
 細根 栗

大塚 弘毅
 馬淵 津枝
 並木 昌人
 大畑 等
 石崎 梓
 芝崎 梓
 石井紀美子
 長浜 聰子
 加藤 法子
 徳吉洋二郎
 細野 一敏
 山崎 幸子
 細根 栗

川縁の競う桜や空の瓶
打揚げの名残りの影や月おぼろ
小高 稔
矢野 忠男

●第四十六回（平成二十七年四月二十三日）
司会 小高 稔

観自在呆けるまで立つ葱坊主
制服は鎖の匂い鳥渡る
S.Lは阿る麦は嘯けり
桜満開夜は大きな河馬の口
散る桜直角に開く河馬の口
晩年は遠近法でフリージア
麦青む胸襟開く適齡期
臍からおぼろ東京に不発彈
子子の生の沈澱仕送り待つ
菜の花畑ダンベルが捨ててある
たれかれの夢を預かりチューリップ
もらったはいがどうするこの風船
田水張る市松模様の水鏡
霞もぐもぐ駱駝の口の一文字
葉桜のどつと押し寄せ眠くなる
げんげ田を見詰めて一日過しけり
古都古道隠しおわせる濃山吹

柏研究句会報告

●第三十四回（平成二十七年三月七日）
（於：柏市「ハックルベリー」2階）
司会 下村 洋子

水に帰す幽かな韻光悦忌
農魂に覚醒のあり雪解川
蛇穴を出て燦々と飢えており
骨肉の争い春芽炎え出しぬ
薄紙を被るやうな雨無言館
ざつくりと結ぶ黒髪梅の花
一匹は首輪している猫の恋
尻餅の大きな窪み雪おんな
淡雪や取り換えられぬ象の足
早春の潮の香ふふむ紙袋

白梅の人抱くやうに枝広げ
蕎麦を打つ「赤色エレジー」口遊み
岡田 春人
松澤 龍一

●第三十五回（平成二十七年四月十一日）
司会 長井 寛

青々と瞳の濡れる孕馬
婆さんの泉下の笑い花みつまた
石を蹴る少年石に風光る
春暁や猫足の椅子遣さるる
このところ眠りの浅き桜かな
花吹雪めまいにそつと繋がる手
石けりの石の行く先山朧
花曇抜ける群像スクランブル
春の闇むかし牛馬人売られ
念仏や芽は薔薇いろに風の中
老猫の肩のごつごつ春の夢
鳥曇り大言海の櫂の舟

●第三十六回（平成二十七年五月九日）
司会 高橋 宗史

重い荷を若葉の風に包みこむ
老い桜今年も会ひに来てゐたり
丸呑みの憲法改正鯉幟
鳩の巢の日矢ふりそそぐ印旛沼
桜葉降る七十年の海の底
母と娘の平行線を馬酔木咲く
蠅一匹追えば夜の端ひるがえす
山桜馬穏やかに黙秘中
桜散るチルチルミチル城みちる

図書紹介

■『冬桜』 山崎 文子
平成二十七年三月二十七日 株式会社東京四季出版
裸木が鉄の音色を売りに来る
喜寿という臍の中の遠い足音
髪染めて寒夜にそつと歳を取る

ひろば

市原市春季俳句大会

四月二十五日、「春野」主宰黛執氏を主選者に迎え、五井会館において開催された。兼題の部は県内から四八六句、当日の席題句会は六十一人の出席をもって実施され、兼題席題ともに木更津市の加藤法子さんが圧勝した。（並木邑人記）

☆兼題の部／紫雲英・朧・雑詠三句一組

市原市長賞

げんげ摘む胎児の許すだけ屈み 加藤 法子

市原市俳句協会賞

朧夜のジャムつぶやきて煮つまれり 佐藤 陽子

市議会議長賞

橋幾つくぐり朧の隅田川 鈴木 喬二

教育長賞

角いくつ金白糖に春の色 内田 聰子

☆席題の部／春惜しむ・鶯

市原市長賞

惜春の肘張っているやじろべえ 加藤 法子

市原市俳句協会賞

庭先の話をつなぐ初音かな 木村 傘休

市議会議長賞

鶯やシルバーガイドの国訛 佐々木結花

教育長賞

うぐいすを聞かや自慢の児を抱いて 池田 正子

《会員・会友の近況》

・先日、宮城県の子川町に行つて来ました。三階建てのビルは横倒しのまま、町の面影もなく殺伐とした風景の広がりました。この町で五十年前生後一ヶ月の長男と遭った津波の恐怖の記憶は消えることはありません。海に花を投げ、「3・11」で亡くなられた方々へ合掌することが私にできる精一杯のことでした。(小高 桂子)

・先日、渡良瀬の「ヨシ焼き」見物をして来ました。広大な遊水地となつていてこの葦焼きの実景は凄まじく、野火煙が十四五本立ち上り陽光を遮つて一瞬村中が真っ暗になりました。思えば治水事業の完成までの道のりは深く長く鉱毒問題解決など先人のご努力に感動させられることばかりでした。嘯目俳句も駄作ながら沢山出来ました。本日四月四日で小生七十二歳になりました。俳句をやつてきて本当に良かったと実感しています。(雅名 鳳人)

・現在も「秋」に所属し同人となつてます。館山市俳句連盟会長を任されています。(庄司とほる)

・平成十二年から続いている小句会が第二土曜日に開かれていたため、柏の研究例会と重なり参加できておりません。もし、第一なり、他の土曜日に変更するようなことがありますれば、参加したいと念じております。(佐藤 映二)

・小生も(数え年)九十歳、こんな元気のない句しか作れません。(佐久間眞城)

・七十代も後半になりました私にとりまして、俳句はよい刺激を与えてくれる文芸に思いません。ことに、同年齢の仲間と過ごす吟行は、楽しい時間です。(佐藤 浩子)

・仕事中心の変わらない毎日を送っています。体の中の時限装置のデジタルの数字が減っていく感覚になりました。以前は数が増えていく感覚だったのが変わったんだな。でも、自然にそうなつたので、自然にそう感じていいこうと思えます。(白木 暢子)

新会員・会友紹介

千葉市美浜区 水野 禮子 (会員)
(推薦者 渡辺 澄)

妻というこの世の記憶とろろ汁
秋冷のいちばんはじめ屋敷神
やわらかに言葉をかきね夜の薪樹
千葉市稲毛区 永井 奈々 (会員)
(推薦者 千葉 信子)

夫を呼ぶそんな日常雪ふれり
クロッカス青春の日のインク壺
日を吸ひし枕が二つ日脚のぶ
船橋市坪井西 松戸 圭 (会員)
(推薦者 塩野谷 仁)

花乱舞隣にゐても遠い人
胸騒ぎする三隣亡の黒揚羽
これつきりの人と流れる花筏
千葉市稲毛区 黒川 秀夫 (会員)
山中 葛子 (会員)

夏の夕トトロ出さうな停留所
まんさくや娘の縁談のまとまりぬ
白百合や少女の自決伝え聞く
鎌ヶ谷市中沢新町 吉川たけを (会員)
(推薦者 重田 忠雄)

亀鳴くや帰宅を阻む放射能
春昼や先に進まぬ文庫本
滑舌の良き二三言夏祭
船橋市三山 深山きんぎよ (会員)
(推薦者 イザベル真央)

まだ夢の途上にありし花曇
青梅雨や病院といふ交又点
蝸牛の渦の真ん中少し鬱
船橋市三山 前島きんや (会員)
(推薦者 イザベル真央)

船虫の髯忙しき昼の月
学僧の蒼きつむりや猫の恋
養花天喪服の胸の真珠かな
船橋市丸山 三宅たくみ (会員)
(推薦者 宇田川智垂)

山藤散る季節一気成熟成す
熱帯夜芝の香高きサッカー場
北風吹きて養老川の真青なる

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 稲川 準
- 入会 (会員) 小林奈央
- 退会 (会員) 栗村 九、鈴木ひろし、小高和子、佐藤由里枝、首藤こころ、鈴木典子
- 転入 (会員) をがわまなぶ(東京都足立区より)
- 移転 (会員) 鮫島いづみ(千葉市中央区蘇我へ)

□ □ 事務局・編集部だより □ □

- 定期総会・俳句大会、春の吟行会と大きな行事があいつぎましたが、いずれも盛会でした。ご協力有り難うございました。
- 来たる十月二十五日(日)に創立三十五周年記念俳句大会が開催されます。作品募集へのご協力と大会へのご出席を皆様にお願ひ申し上げます。
- また、ご案内の通り、ミニ吟行会を行います。今年は銚子です。奮つてご参加ください。

現代俳句千葉 第一一七号
平成二十七年五月三十一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田六六五番地 松澤 龍一

千葉県現代俳句協会事務局
〒270-1471 船橋市小室町 二八〇四 高木 一恵

電話 〇四七-四五七-二九一二
FAX 〇四七-四五七-二九七二